

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

### 日本のヴァイオリン近代史 I

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 1984-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/665">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/665</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 日本のヴァイオリン近代史 I

松本善三

日本にはヨーロッパと違って古楽器からヴァイオリンに至る長い歴史はない。

日本のヴァイオリンの歴史は、ある時代に音楽好きなヨーロッパ人が偶然ヴァイオリンを持込んだときから始まる。

そこで、それでは最初にヴァイオリンを弾いた日本人は誰か、そしてそれはいつの頃のことか、という疑問がうかぶが、これには〔明治音楽史考 遠藤宏著 P. 24〕が答えてくれる。

「……………徳川期の西洋音楽についての一端を述べれば、寛永十四年（1637年）島原乱後、オランダ一國に貿易が許可されて、同十六年以後長崎出島の蘭館に居住するようになり、この出島からのみ外国文化が我国に伝へられ、そこでは西洋音楽も行はれ、少数の従僕の黒人はブラス・バンドを組織してゐたこともあった。フロイト（笛）、オーボイ、トラムペート、ワールトホルン等の楽器名は蘭学者の間には夙に知られていた。長崎の遊女がヴァイオリンを奏したことも伝へられている。」

これによれば、正確な年代は不明ながら、これ以前の日本のヴァイオリンについての記録は考えられまい。

それにしても、オランダ人たちと交流のあった長崎の遊女たちが日本のヴァイオリンの歴史を飾るとは思いもかけないことである。

ヨーロッパでは、音楽は生活を豊かにするために自然発生し、その発展に共ない芸術となりその花を咲かせたが、日本の西洋音楽は徳川時代末期に軍隊の士気を鼓舞するための軍楽の輸入から始った。

天保年間（1830年—1843年）、長崎の高島秋帆はオランダ式兵学を学び、鼓笛隊の必要性を認めオランダ式軍楽隊を編成した。（註1）

さらに、嘉永六年（1853年）にはペリーの率いるアメリカ艦隊の軍楽の演奏を聴き、その必要性を痛感した人々はその後、明治の初期に海軍はイギリス式軍楽隊を、陸軍はフランス式軍楽隊を作ることになる。

ところで、諸外国の圧力に屈した徳川幕府は永年の鎖国を解き開港せざるを得なくなった。1858年（安政五年）に調印された日米修好通商条約が始めで、ついで同年中に、オランダ、ロシア、イギリス、フランスの四ヶ国とも条約を結び、翌1859年7月（安政六年）に横浜、長崎、函館が開港され、大阪、神戸は1867年1月（慶応三年）に、東京、新潟は1868年1月（明治一

年)にそれぞれ開市、開港され、各地に外国人の居留地が設定された。(註2)

はじめ、この居留地に住む外国人たちの風俗習慣に目を見張った日本人も、やがて、彼等の持ちこんだ西洋音楽にも興味を持ち始める。各居留地では外国人たちが無聊を慰めるための各種の娯楽が催うされていたが、横浜と神戸においてはとくに盛んであった。

1863年(文久三年)10月には、早くも、オーストラリアから4人の音楽家が横浜を訪れている。一行のうち、ロビオ氏というヴァイオリニストが特にすぐれていた。(註3)

このロビオ氏がいかなる、また、どの程度のヴァイオリニストであったかは全くわからないが、明治以前に、日本でヴァイオリンの演奏を聴いた人がいるとは予想外である。

1863年といえば、ヨーロッパではヨアヒム(J・Joachim) ウィニアウスキ(H・Wieniawski)などが活躍していた年代である。このロビオ氏も相当な弾き手であったかも知れない。

この頃、横浜居留地で初めてのアマチュア・コンサートが開かれ、聴衆250人が集まった、とあるから居留地在住の人口も相当あったと思われるが、1868年(明治一年)9月の英字新聞〔ジャパン・ガゼット〕The Japan Gazette による調査によれば、欧米人の合計は約570人と伝えられている。

なお、1863年(文久三年)以来、イギリス及びフランス両国の軍隊が居留地警備の名目で駐屯していて、60年代から70年代初頭にかけては常時千人を超えていた。(註4)

こうして、年々盛んになる居留地の娯楽施設のために、1866年4月(慶応二年)、オランダ人ヘフト M. J. B. Noordhoek Hegt によってゲーテ座(The Gaiety Theatre)の前身である劇場の設備を持った倉庫が建てられ、やがて、この劇場が盛んな活動を始めることになる。(註5)

ところで、明治43年1月の音楽界第三巻第一号に松山岩根が(日本に於けるヴァイオリンの製作)という文をのせたが、それによれば、

「……………1871年(明治4年)頃、横浜に英国人アレキサンダー・クラークなる人があって、ヴァイオリンその他の楽器類を本国より取寄せ売品とした。これ実に我国輸入ヴァイオリンの嚆矢であったが、其当時は壹ヶ年に僅々二、三十個位、売れたのみで、其後も引続き多少輸入をして居ったが、余り盛大ではなかったようである。……………」(註6)

この明治四年という時期にヴァイオリンを買った日本人が年に二、三十人いたとすると、その人たちは実際にヴァイオリンを弾いたのだろうか。まだ、ヴァイオリンの指導者も指導書もなかった筈である。

1874年(明治七年)12月には現在の宮内庁雅楽部で洋楽の学習が始まっている。

これは、時勢のため宮中でも洋楽の必要を認めたからであり、その目的は主として外国使臣等を饗応する場合の奏楽であったが、その上、若い伶人(楽人)たちの間には西洋音楽も学習したいという気持ちがあったからで、まず、海軍軍楽隊の隊長中村祐庸を師として洋楽の研究を始めた。

さらに、9年には雅楽部では伶人たちを新銭座にあった海軍軍楽隊に通学させ、イギリス軍楽隊長フェントン(John W. Fenton)に吹奏楽を学ばせた。(註7)

この雅楽部は文武天皇の大宝元年（701年）に大宝律令により雅楽寮が作られて以来明治七年までに1173年の歴史を持つものだが、明治時代になり、洋楽も取り入れることになったものである。

この雅楽部内に出来た吹奏楽団のなかで Es クラリネットを受け持った多<sup>ヒサヨリ</sup>久<sup>ヒサハル</sup>随（彼の子は久<sup>ヒサオキ</sup>寅<sup>ヒサナオ</sup>であり、次の時代は久<sup>ヒサトシ</sup>興<sup>ヒサトシ</sup>、久<sup>ヒサトシ</sup>尚<sup>ヒサトシ</sup>であり現代では久俊氏である。久俊氏はチェリストだがその父、祖父、曾祖父は雅楽とヴァイオリンで、とくに久尚（1917年～1968年）は舞楽の名手でもあった。）は、その後、日本人として最初のヴァイオリン教師となる。

1869年（明治二年）に発刊された「都仁志喜」に明治のはじめ頃の楽人の氏名が列記されているが、このなかに、

上野守 多 左将曹 多久随

と、書いてある。（註8）

これは、彼の二十才頃だったろう。

1875年（明治八年）12月にはアメリカの女流ヴァイオリニスト、ジュニー・クロース Jenny Claus が来日し、横浜の Town Hall, そして1月にはゲーテ座で演奏した。

タウン・ホールでの演奏は声楽、ピアノそれに弦楽四重奏のジョイント・リサイタルである。図1

一体、この頃の演奏会はみなジョイント・リサイタル形式だったのだろうか。

かのパガニーニの演奏会ですらそうである。Stephen Stratton の書いた Nicolo Paganini His Life and Work にパガニーニの演奏会のプログラムが5枚載っているが、いずれも声楽家とのジョイント・リサイタルである。その一つ。図2

ジュニー・クロースもかなりの演奏家だったらしく、当時の新聞の記事や批評に、

「以前からヴァイオリニストとして盛名の高い………」とか、「ヨーロッパで広く名声を得ている………」と書かれているが、彼女も如何なる人か、アメリカのヴァイオリ

# TOWN HALL, MACHIGAISHO.

By the kind permission of His Excellency  
the Governor of Kanagawa Kwa.

—  
T-O-N-I-G-H-T,  
Thursday, 23rd Dec.,

LAST  
GRAND INSTRUMENTAL & VOCAL  
CONCERT,

BY MISS  
Jenny Claus,

The Celebrated Violinist.

Prior to her departure for San Francisco  
kindly assisted by

Gentlemen Amateurs.

PIANIST.....M. J. REKEL

PROGRAMME:  
PART I.

Viola Solo—Grand Concerto.. Mendelssohn.  
Andante.

Finale. "Allegro Molto Vivace."

MADAMOISELLE JENNY CLAUD.

Aria—"Cari Mio Ben".....Giordani.

GENTLEMAN AMATEUR.

Piano Solo—"Sonata Pathétique".....

Beethoven.

M. JOSEPH REKEL.

Violin Solo—"Ungarische Tänze No. 1,"

(Brazil),.....Jaschica.

TEHLHAUSER MEXICAN and ROMANCO. LEONARD.

MADAMOISELLE JENNY CLAUD.

PART II.

String Quartet in D, Op. 64, No. 1., Haydn.

Allegro Cantabile.

Finale Vivace.

(Two Violins, Tenor, and Violoncello.)

MADAMOISELLE JENNY CLAUD and GENTLEMAN

AMATEUR.

Melody—"Nearereth".....Gounod.

GENTLEMAN AMATEUR.

Piano Solo—"The Sailor's Song"....Kubel.

M. REKEL.

Violin Solo—Ballad and Polonaise

.....Vieuxtemps.

MADAMOISELLE JENNY CLAUD.

ADMISSION: TWO DOLLARS.

Tickets may be had, and Seats reserved  
at MESSRS. A. F. CHAMBERLAIN & CO., and  
at the Door of the Hall on the Evening  
of Performance.

DOORS OPEN AT HALF-PAST EIGHT; TO COM-  
MENCE AT NINE O'CLOCK.

The Performance will terminate in time for  
the last train to Tokio.

Yokohama, Dec. 21st, 1875.

Ed.

ジュニー・クロース独奏会の新聞広告  
「ジャパン・ガゼット」明治8年12月  
23日付

図1

KING'S



THEATRE

SIGNOR

PAGANINI'S

Sixth and Last,

GRAND CONCERT:

THIS EVENING  
MONDAY, JUNE, 27th 1881.

PROGRAMME

PART I

Overture in D Romberg  
 Duetto signor Rubini, and Signor Santini, Giesebelt  
 Grand Concerto in E flat, composed & performed by Signor Pagnini  
 1. Allegro Maestoso,  
 2. Adagio Appassionato  
 3. Ronde Brillante

Aria signor Petralia Rossini  
 Overture Euranthe. Weber

PART II

Sonata with Variations on a Tema by Haydn, composed & performed  
 ON ONE STRING  
 the Fourth String by Signor PAGANINI, Rosini  
 Duetto, Signor Rubini and Signor Santini,  
 Cavatina, signor Petralia, Mercandante  
 Prelude and Variations on the Tema "Nel cor piu non mi sento"  
 without orchestral accompaniment by  
**SIGNOR PAGANINI.**  
 Overture Zaira, Winter.  
 Conductor - - Signor M. Costa  
 Leader. - - Signor Spagnoletti

The Prices of Boxes will be the same as on Opera Nights.

ORCHESTRA AND STALLS, ..... 1s 6d.  
 AD-MISSI-ON to the PIT, ..... 8 10 d  
 AD-MISSI-ON to the GALLERY, ..... 6 0 0  
 To commence at Half-past EIGHT o'Clock, and the Doors to open One Hour before the Performance

\* \* Boxes, Stalls, and Tickets, may be had at the Box-office, Haymarket

J. H. COX, Printer, 14, Garden Row, London Road, Southwark

PLATE 18. (See Appendix.)

図 2

ニストたちに尋ねてみても誰も知らないし、ヴァイオリニストの名鑑にも載っていない。

日本での彼女の演奏は図表 1 として掲載のプログラムのほかにも「クロイツェル・ソナタ」2, 3 楽章, ヴェーターのファウスト幻想曲 (これはウィニアウスキ作の間違いではなかろうか), メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲 2, 3 楽章などあり, 聴衆に強い感銘を与えた。(註 9)

日本に蓄音器の存在が知られたのは, 明治 11 年 7 月 25 日発行の「同人社文学雑誌」の記事に

よる、とされている。当時は“蘇言器”といった。同年11月16日、イギリス人ユーイングが帝大物理学教授として招聘され、そのとき錫箔器を持参した。翌年3月、これが一般公開され、東京日日新聞社の福地桜痴社長が、「こんな機械ができると新聞屋は困る。」というセリフを吹き込んだ。

明治22年には駐米公使陸奥宗光が蠟管器を農商務大臣井上馨に贈り、シリンダー（蠟管）に「この機械を日本でも広めて欲しい。」とメッセージした。翌23年には、エジソンが駐日アメリカ公使を通じて、明治天皇に自作の蠟管器を献上、これは今も国立科学博物館に保存されている。史上名高い鹿鳴館で、井上馨は内外から200人を招待、試聴したという記録も残っている。同29年、蠟管器が商品として、横浜のF・W・ホーン商会を經由し日本に最初に輸入された。この頃から、蓄音器と呼ばれ出した。

ベルリーナの平円盤レコードの日本発売は明治36年であった。(註10)

なお、このことについては増井敬二氏の「データ・音楽・にっぽん」に詳しく書かれている。(p.199, 200)

1879年（明治十二年）春、ドイツ人フランツ・エッケルト（Franz Eckert 1852—1916）が、イギリス人フェントンの後任の海軍軍楽師として来日した。

彼は、いわゆる「お雇い外国人」の一人である。明治政府は、まず民権に重きをおいた国家体制、社会組織を欧風化するため、すべての分野に外国から指導者を招いた。明治5年から31年までに政府が招いた外国人指導者は、6,193人であり、民間が雇い入れた技術者は、12,540人で、総計18,733人という膨大な数であった。(註11)

この「お雇い外国人」のなかで音楽関係者はわずか十人に過ぎなかったが、エッケルトはそのうちの一人だった。

彼は教師としてはすこぶる厳格だったが、優秀な指導者であり、各種の楽器に通じ、とくにオーボエは巧みであった。ヴァイオリンも少しは弾けたかも知れない。

明治7年に洋楽の研究を始めた雅楽部の芝葛鎮、上真行、多忠廉、小篠秀一、林広季らは彼についてヴァイオリンも習ったが、もともとエッケルトは吹奏楽の人で、ヴァイオリン教師としては力が足りず満足出来なかった。そこで、彼等は翌13年来日し、伊沢修二と共に日本の音楽教育に大きな貢献をしたメーソン（Luther Whiting Mason 1828—1896）の指導を受けることになった。

その秋には多久随、芝祐夏もそれに続いた。(註12)

メーソンは伊沢修二が明治8年にアメリカに留学した時師事した人であり、伊沢は、彼こそ日本における西洋音楽の指導者としてうってつけの人、と思い、伊沢が創設に努力した音楽取調掛で、唱歌、音楽理論、管弦楽などを指導させるために招いた人であるが、メーソンはヴァイオリンも弾け、多くの日本人にヴァイオリンを教え、彼自身しばしば音楽会にも出演し、ヴァイオリンの独奏をした。

彼は着任早々、楽器の購入に力を入れ、アメリカ・マサチューセッツ州ケンブリッジの楽器商ベンジャミン・カッタールへ五箇の弦楽器を注文させている。(註13)

さらに、同14年2月1日には

「私儀ボストン府ワシントン。ストリート。百七十七番トムソン。エンド。ヲデル組ニ於テ楽器ヲ左ノ代價ニテ購入仕候也」と、次のリストにある楽器を輸入している。

- 一 ベーカル氏製バイオリン 四箇  
代價米金貳百弗 一箇につき五拾弗  
内二箇音楽取調所用  
二箇伶人所用
- 一 ビオラ 一箇  
代價米金五拾弗  
音楽取調所用
- 一 ビオリンセロ 一箇  
代價米金四拾五弗  
音楽取調所用
- 一 ビオリンセロ 一箇  
代價米金貳拾弗  
伶人所用
- 一 ダブルベース 一箇  
代價米金六拾弗  
音楽取調所用
- 一 クラリヲネット 囊入二箇  
代價米金四拾弗  
伶人所用
- 一 フルート 箱入一箇  
代價米金貳拾弗  
伶人所用

取調掛では少なくとも明治14年には、バイオリン二挺、ビオラー一挺、セロ二挺、コントラバス一挺を持っていたことになり、同15年にはバイオリンを一挺、同18年に二挺、同12年にはコントラバスを一挺購入している。(註14)

当時の取調掛入学試験科目は(註15)、

読書 = 日本外史の類

作文 = 書翰文、記事文、片仮名の類

算術 = 比例以下

音楽＝雅楽器

(雅楽器を既習せし者に限りこれを課す)

箏

(箏を既習せし者に課す)

清楽器

(清楽器を既習せし者に課す)

西楽器

(西楽器を既習せしものに課す)

俗楽器

(俗楽器を既習せし者に課す)

発音及聴音

(初新の者に限りこれを課す)

英, 仏, 独書

(既習の履歴ある者に限り之を課す)

読本の類

であり、生徒は修身、唱歌、洋琴、風琴、箏、胡弓、専門楽器、和声学、音楽論、音楽史、音楽教授法を修得しなければ卒業出来なかった。

多久隨は明治13年10月に取調掛に入学した第一回生22人の追加として同年11月に入学を許されたが、同16年3月2日には早くも式部寮伶人兼取調掛助教となっている。(註16)

しかし、これはあくまで兼任であって、彼の雅楽部での職はそのままである。

明治19年8月発行の「雅楽部職員録」には、

雅楽師	年俸 180円
	従九位 多久隨

とある。因に、国歌「君が代」を雅楽から選譜した林広守は当時雅楽師副長であったが、彼は、奏任六等 年俸 360円であった。(註17)

この明治期における西洋音楽の移入時代から普及時代にかけての期間にはやくも日本人による音楽書が出版されている。その最初の音楽書は、

音楽入門 岩田通徳編述

であり、明治11年9月に出版されている。

この本は、取調掛のお雇い外国人音楽教師メーソンが書き、内田弥一が翻訳した。

音楽捷徑

明治16年4月

音楽指南



明治17年4月

以前であり、この岩田通徳がいかなる人物か、また彼が西洋音楽を学んだ事情を知りたいものである。

この「音律入門」は、日本音律を西洋音楽と比較し説明したもので、売価は六銭五厘であった。(註18)

横浜のゲーテ座では取調掛開校以前から盛んに音楽会が開かれていて、明治13年9月には、イバーク氏のヴァイオリン演奏会があった。このイバーク氏についても何もわからない。

また、取調掛では明治13年(1880年)末、文部省会計局に、「来14年度中音楽取調掛需要之外国品見積書」を提出し、そのなかで各種楽器を学ぶための教則本20冊の購入を要請した。

そのなかに、日本で最初に用いられたと思われるヴァイオリン教本が二冊含まれていた。

それは、

バイオリン (ラスセル氏著)

バイオリン (トムソン氏著)

と、記録に残されているが、その後散逸してしまい、今日どのような教本であったか不明である。

私は、これらの二冊の教本を是非とも手に入れたいと思い、手を尽して見たが徒勞に終わった。

最後の手段としてアメリカ、ワシントンの国会図書館 The Library of Congress に問合せの手紙を出したが、同館員の Wayne D・Shirley 氏から懇切な返事が届き、ワシントンの国会図書館にも無いことがわかった。

残念だが幻の教本としか言いようがない。

現在、東京芸大図書館に保管されている〔取調掛時代所蔵目録〕のうち、ヴァイオリンに関する教本、楽曲のなかにトムソン John Thomson のヴァイオリン曲 Capriccio がある。図3 恐らく、ヴァイオリン教本を書いたトムソン氏と同一人と思われる。

以下、〔取調掛所蔵目録〕からヴァイオリンの楽譜のみ列記する。

## 教 本

Alard, Jean-Delphin (1815~1888) Ecole du Violon

Méthode complète et progressive à l'usage du Conservatoire

Bériot, Charles de (1802~1870) Méthode de Violon, op. 102. Divisée en 3 parties

Eichberg, Julius (1824~1893) Eichberg's Complète Methode for the Violin

Herman, Ad.

petite Méthode pratique pour le Violon

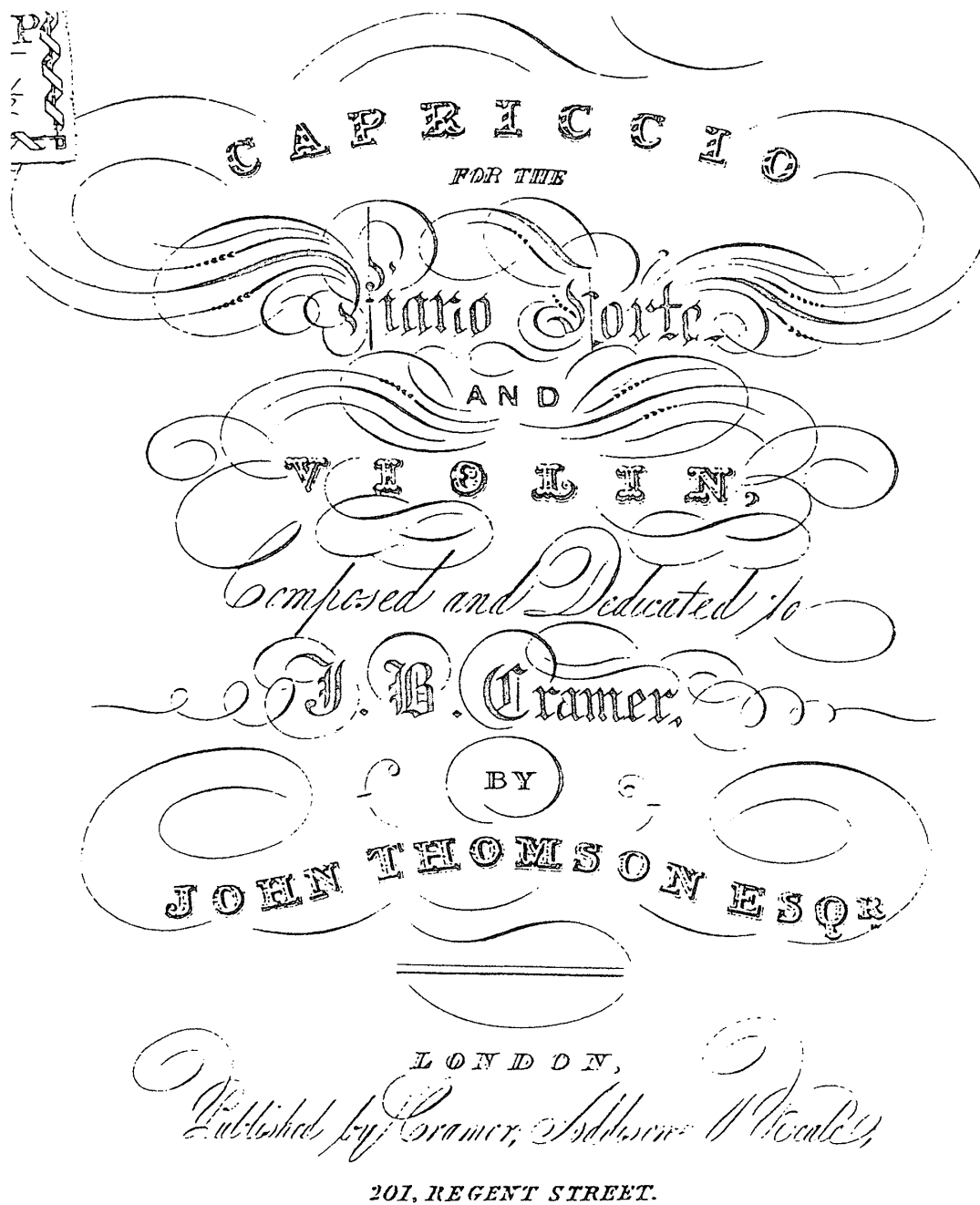


图 3

Herman, Ad.

Methode Complète de Violon op. 40

Kreutzer, Rodolphe (1766~1831) 42 Etüden oder Capricen für die Violine

独奏曲

Alard, Jean-Delphin (1815~1888) Berceuse Tyrolienne op. 49

Beethoven, Ludwig van (1770~1827) Konzert und Romanzen

Bériot, Charles de (1802~1870) *Airs for the Violin with all the Variations*  
Boosey's 200 Ballads and Operatic Airs,  
Boosey's 200 Dances  
Boosey's 200 English, Irish, & Scotch Melodies  
Rimbault, Edward Francis (1816~1876) *Chappell's 100 Popular Songs*  
Spohr, Louis (1784~1859) *Barcarole in G dur, Op. 135. No. 1*  
Thomson, John (1805~1841) *Capriccio for the Pianoforte and Violin*

## 二重奏曲

Dancla, Charles (1817~1907)

*Trois Duos pour 2 Violons op, 24, 25, 32, 33, 34, 35, 60, 61, 62*

Gebauer, J.

*Douze Duos à l'usage des commençants, op, 10*

Kummer, Friedrich August (1797~1879) *40 Morceaux pour deux Violons*

Meerts, Lambert (1800~1863) *Douze Études pour Deux Violons*

Rode, Pierre (1774~1830) *Trois Duos pour deux Violons*

Volckmar, Wilhelm Valentin (1812~1887) *Opéra-Album, pour 2 Violons*

Volckmar, Wilhelm Valentin (1812~1887) *Volklieder für 2 Violinen*

以上であるが、ここで不思議に思えるのはトムソンと同時代の人であり、日本で古くから近代まで用いられたホーマン Christian Heinrich Hohmann (1811~1861) の教本のないことである。

明治7年からの洋楽研究の歴史を持つ宮内庁楽部の楽人たちにこのことについて尋ねると、「うちは昔からホーマンでした」

と、答えた。

また、一説によれば、ホーマンは明治21年11月に東京音楽学校に技術監督者として雇用され、ヴァイオリン、和声学、作曲法、並びに一般唱歌を教えたディットリッヒ Rudolf Dittrich, (1861~1919) が来日の際持って来たそうで、取調掛は明治20年10月4日に東京音楽学校と改称されたため、取調掛の所蔵目録に無いのかも知れない。

次に、取調掛の開校後積極的に取り組んだ洋楽器の試作について触れておく。

取調掛が最初に取り組んだ楽器は小さなリードオルガンとヴァイオリンであった。

リードオルガンはメーソン所有のオルガン二台を買い上げ、其の構造を研究し試作することになり、順調に事は運んだらしいが、ヴァイオリンはそう簡単にはいかない。

明治15年と17年度の申報書には、

1, バイオリンは輸入に頼っていること

2, しかし「幸ニ、伶人中バイオリン熱心家ノ意ヲ承ケテ、老練ナル楽器師ノ試製セルトコ

ロ、功ヲ奏シ」たこと

3, メーソンも木材の使い方その他, こまごま教示したこと  
と書かれている。(註19)

前文中の「老練ナル楽器師」と同一人かどうかかわからないが、明治40年10月の音楽新報に次の文がある。

我国楽器製造界の奇人（ヴァイオリン製造の嚆矢気概ある職工）

「今でこそ其処此処に楽器製造会社も出来、音楽家も続々輩出せるものの其初め明治十二年の頃伊沢修二氏等によりて音楽取調処なるもの出来漸く唱歌の端緒を開きし当時の如きは只漸く牛込なる宮内省雅楽部及び前記取調処の他にニコライ会堂などの少数教会にヴァイオリンなどの楽器にありしものと其弹奏は勿論楽器の名称さへ知らざるものなりしを浅草区新富町二十一番地松永定次郎（58才）と云へるが其頃深川に在りし琴三味線製造人の枠にて楽器製造には元より多少の経験ありしも其頃は三味線などの需要者は維新前の如く上流社会のものならで殆んど芸妓などの輩のみなるより何かな変りたる職を覚え楽器製造(三味線)は断念せんものと思ふ矢先き西洋にては我国の三味線の如きものにし其音色の極めて美なるものと聞き是非其楽器一度見ま欲しく思へども如何せん其標本とすべきものなきより彼地此地にて聞き合せ漸くニコライ会堂にある由を聞込みたるより早速赴きて其旨事務所に申込み許しを得て同教会の楽師デミテリー氏に面会したるも元より言語通ぜざる上に其名称をも知らぬ事とて随分滑稽なる振舞もありし由なるが漸く其身振り手振りにて要領を得初めてヴァイオリンを見るや飛び立つ計りに喜び直様用意の矢立を取り出して曲しく図を取りしが其材料にテシオ松、楓、栃等なれども市中には其等の材を売る家もなかりしより洋服屋などにて外国より輸入する羅紗などの外箱を購ひ来り其れを以て初めてヴァイオリンを製したるが之れ我国にて西洋楽器の製造されたる嚆矢にて実に明治13年8月の事なり……………」(註20)  
ところで、東京朝日新聞の昭和59年8月28日付け夕刊の〔あすは〕欄に、

バイオリンといえば秋……………。愁いを含んだ美しい音色に魅せられてバイオリンの試作に取り組んだ31才の琴・三味線製造業松永貞(?)次郎が、苦心の末に国産第一号を仕上げたのが、1880年(明治13年)のこの日。いま年間四〜五万丁も生産され、日本製も一流の評価を得ているが、最も注目されているのが中国製の進出ぶりだ。ロス五輪での活躍を連想させるような勢いで世界一の座を占めたその特色は、国営工場による標準化と低価格である。

ヴァイオリン製作に関してその才能教育で世界的な名声を持つ鈴木鎮一氏は次のように書いている。

〔扱て東京に於ける最初のヴァイオリン製作家は誰であるかと言へば信州長野の人で、その頃雅楽器の製作をして居られた神田某氏で、明治17, 8年頃にその頃の伊沢修二校長のすゝめにより初めて製作に従事せられたのであった。其後又明治20年に頼母木源七氏によって初められたのであった。然し前記の二氏は其後残念乍ら長く継続せず中絶してしまわれたの

である。然しこゝに明治22年頼母木氏に指導をうけ共に製作研究せられた人に山田縫三郎氏がある。氏は頼母木氏中絶の後を継いでヴァイオリン製作を続けられた唯一の人……………山田氏は明治40年前後に丸山信、鎌瀧網次、平松某の三氏にヴァイオリンの製法を伝へ……………東京にはまだ此外明治30年前後には深川の富岡門前町に斉藤某氏及び浅草寿町に居を据えて居られた斉藤氏の舎弟松永氏等があった。然し皆自然消滅の形であった。】(註21)

しかし名古屋に於ける鎮一氏の実父鈴木政吉は日本のヴァイオリン製作者として唯一の成功者であろう。

和歌山藩士の御手先同心であった彼は維新後三味線を作っていたが生活に困り、人にすすめられヴァイオリンを製作し始めたが、早くも明治22年には東京で銀座の共益商社、関西では三木楽器で発売している。

1885年(明治十八年)6月8日に、上野公園内東四軒寺町文部省新築館で、佛国楽士モーレル氏(James Creighton 著: Discopaedia of the Violin の p. 517 に Moller というヴァイオリニストが、1898年(明治三十一年)に Bettini の蠟管に数曲録音していることが記載されている。同一人かも知れないが、今夏、カナダで面接したクレイトン氏は Moller はデンマーク人若しくは北歐人と思う、と語った。)の演奏会があった。

その演奏曲目は、やはり日本音楽とのジョイントリサイタルで

#### 第一部

- 一 ファンテジー           カプリス  
                          作者ヴェキウタン  
                          白耳義風クラシック音楽
- 二 ロマンズ、アン、ファ曲名  
                          独逸風クラシック音楽  
                          作者ハン、ビートーブェン
- 三 新晒日本俗楽三曲合奏
- 四 フォースト曲名  
                          作者グッノー  
                          オペラ  
                          ファンテジー  
                          調和者デ、アラール  
                          仏蘭西風近代楽

#### 第二部

- 五 グラン、コンセルトー  
                          仏蘭西風クラシック音楽

作者シャルド、ベリヤー

六 スーヴニール、デードン曲名

作者エードン

澳地利の頌歌

調和者レヲナール

七 巢籠日本俗楽三曲合奏

八 イル、トロヴァートル曲名

作者ヴェルデー

オペラ

ファンタジー

調和者デ・アラール

伊太利風近代楽

なお、このプログラムには次の解説が載っているので併せて載せておく。

左に西洋音楽家所用の数語の解釈を録す

クラシック」ハ古代風ノ楽ニテ其趣味深沈優雅ニ渉リ高等ナル音楽ナリ

モデルン」ハ近代風ノ楽ニテ其趣味快活ニシテ通俗人衆ノ耳ニ入り易キ人情ニ近キ音楽ナリ

フハンテジー」ハ幻楽ト訳ス即幻想ノミヲ空構シタルモノニシテ其作法一モ音楽ノ規則ニ抛ラズシテ作者ノ幻想ヲ自由自在ニ表出シタルモノナリ

カプリス」ハ楽曲製作ノ通規ニ拘泥セスシテ想像ニ耽ケ飽クマテ我欲スルトコロノ幻想ヲ長ゼシメタルモノニテ之ヲ「フハンテジー」ト比較スレバ「フハンテジー」ハ現在スルトコロノ幻想ニシテ楽曲ノ影響即チ此「フハンテジー」ノ為ニ感動スルトコロノ情ハ演曲ノ時ノミニ係リ「カプリス」ハヤヤ猛烈ナル気色ヲ帯ヒ「フハンテジー」ヨリ更ニ荒々シキトコロアリテ其影響引テ永感スルモノナリ更ニ之ヲ約言スレバ「フハンテジー」ハ即席ノ作ノ体ノモノニシテ「カプリス」ハ熟考深按シテ作りタルガ如キモノナリ

ヲペラ」ハ戯曲ト訳ス此ノ楽曲ハ節ヲ附ケテ唱フ部分ト誦読体ニ演述スル部分ヲ交ヘ勢強キ箇所ヲ加ヘ其他種々ノ潤色ヲナシ而シテ活発ナル動作ヲ表出スルモノナリ蓋シ「ヲペラ」ハ西紀千六百年フロレンスノ人ヲッタビオ、リナクシーニ發明創作スルトコロナリトイフ

シンフォニー」ハ雅楽ニ所謂序破急ノ如キ序部、結部ヲ全備シタル器奏的ノ楽ニシテ大合奏ニ用フベキモノナリ

ロマンス」ハ優美ナリトイヘトモ甚タ不規則ナル製作ノモノナリ

コンサート」ハ時ニ其楽器ノ妙所ヲ呈出センガ為ニ作レル楽曲ニシテ他ノ諸楽器合奏ノ部分ヲモ具備セルモノナリ

グラウンド、コンセルトー」ハコンセルトーノ更ニ大仕掛ケナルモノライヘリ(註22)

この音楽会のあった翌月、つまり18年7月20日に音楽取調掛は第一回の卒業生を送り出した。取調掛の第一回生は22名であり、その氏名は多くの文献に載っているが、興味深く思われるので、ここにも載せる。

伝習人入場許可(註23)

志願人性名

鳥居忱 (栃木県士族 二十五年六ヶ月)  
古筆文 (東京府平民古筆了伸長女三十年十二ヶ月)  
馬場カネ (東京府平民馬場逸斎妻四十四年十ヶ月)  
板倉種 (東京府華族 満十八年)  
加藤サダ (神奈川県士族加藤景直妻三十六年七ヶ月)  
中村専 (東京府士族中村清行長女十七年九ヶ月)  
上野鈴 (東京府士族上野義男長女十二年十二ヶ月)  
米田テウ (静岡県士族米田俊徳妻十四年三ヶ月)  
遠山甲子 (静岡県士族遠山政支次女十四年一ヶ月)  
市川ミチ (東京府平民市川惣太郎長女十二年一ヶ月)  
林栄 (東京府平民林新助長女十九年八ヶ月)  
林蝶 (同次女 十四年十ヶ月)

宮内省雅楽部伶人 奥好義, 安倍季功, 辻則承, 林広継, 上眞行, 小篠秀一

次いで同月十一日付で次の四名の許可を上申している。

内田久仁 (東京府士族内田正雄後家三十三年一ヶ月)  
市川米子 (東京府平民市川惣太郎妻満三十七年)  
多久隨 (伶人)  
山登松齡 (東京府平民満三十七年)

これを見れば、年齢がさまざまであり、12才の少女、14才の人妻、33才の後家もいるのは奇異な感があるが、これは取調掛が学校としてのありかたが整っていなかったからで、これでは入学希望者は誰でも入学出来たとしか思えない。

この22名中、第一回全科卒業生は、遠山甲子、市川ミチ、それに、中途から入学した幸田延の僅か三名であった。(註24)

この第一期生のうち、明治15年3月1日にまず、加藤貞と鳥居忱が、そして藤川さる(?)が3月15日に、同16年1月13日に林てふが助手に任命され、同3月2日には多久隨が助教となっ

ている。幸田延，遠山甲子，市川道子の三名は18年7月27日に助手となっている。

延は卒業後引き続き研究科に入り，さらに四年間の勉強をしたが助手としての初任給は八円であった。(註25)(註26)

なお，幸田延は麴町飯田町にある明治女学校の唱歌教育開始に伴い，週一回出向することになった。(註27)

さて，取調掛はその授業成果を内外に示すために第一回の卒業演奏会を催すことになった。

それは，明治18年7月20日(月)午後二時から上野公園地文部省新築館で催され，教師，助教，在學生を交えての大演奏会であった。

この時のプログラムも多くの文献に見られるが，これを省くわけにはいかない。

そのプログラム(註28)は，

### 第一部

洋琴独奏曲	遠山甲子女
ポロネーズ	ショパン氏作
植生の宿	四部合唱
洋琴連弾曲	小山作之助，白井規矩郎
レ・セーゾン	ルルー氏作
“Les Saisons” Ch Leroux	
洋琴独奏曲	市川道女
ポラッカ・ブリアンテ	ウェバル氏作
連奏曲	ヴァイオリン 幸田延女
洋琴	遠山甲子女
ラスト・ローズ・オブ・サンマー	
	フンテン氏作

### 第二部

洋琴独奏曲	幸田延女
アウフォデルング・ツム・タンツ	
	ウェバル氏作

### 歐洲管絃楽

ヴァイオリン	多久隨
ヴィオラ	辻則承
ヴィオロンセロ	上眞行
フルート	奥好義
リーダー 指揮者	エッケルト氏



テレセン・ワルツ フォースト氏作

“Theressen Waltz by Faust”

絃楽 クワルテット ヘーデン氏作〔ハイドン〕

唱歌

其一 本所生徒

不二山 楽曲 ヘーデン氏作

歌詞 加部巖夫

ヴァイオリン, ヴィオラ, ヴィオロンセロ, フルート共奏

其二 本所生徒

君ハ神 楽曲 ビートーベン氏作

歌詞 里見義

歐洲管絃楽器共奏

この発表会で、幸田延はピアノ及びヴァイオリンを演奏し、その実力を示したが、当時の音楽界のレベルとしてはまさに天才的な女性であった、と思われる。

ただ、当日のプログラム中理解出来なかったのは、

テレセン・ワルツ フォースト氏作

である。「音楽教育成立への軌跡」p. 366に、〈テレセン・ワルツ フォースト氏作〉は、グノーの〈ファウスト〉の書誤りと推定されるし、とあるが、オペラ「ファウスト」には「テレセン・ワルツ」というワルツはなく、これは、増井敬二氏の言われるように、カール・ファウスト Karl Faust 作の Theresen Waltz つまり、テレーゼのワルツのことであろう。

Karl Faust (1825～1892) は、東独のフランクフルト、ブレスラウの軍楽隊長であった人で、作品としてはオペレッタ、宮廷の舞踏音楽などを書いた人である。(註29)

(蛇足とは思うが、ファウスト氏がドイツ人であるなら、Waltz でなく Waltzer と書くべきだろう。また、当日のプログラムには、はっきり Theressen と書いてあるが、これも書誤りだろうか。)

このプログラムの表紙には、

「音楽取調所卒業演習会手続書」

と、書いてあり、当日は、太政大臣三條實美卿以下文部省の高官等三百餘名の臨席があって非常な盛会であった。

そして、入場券には、次のように書いてあった。

音楽取調所卒業演奏会

「三條附属二人」臨場

明治十八年七月二十日(月曜日)午後二時より上野公園地内文部省新築館に於て執行

音楽取調所長 伊沢修二

注意、〔此切符に宿所姓名等詳記無之者は何人によらず受付係に於て堅く謝絶すべし。〕  
(註30)

(ここまでの文中に取調掛と取調所の二通り名称があるが、これは明治13年3月に開校した音楽取調掛が同18年2月に音楽取調所と改称されたからであり、同18年12月に再び音楽取調掛と改称、同20年10月4日に東京音楽学校と改称されたが、同26年9月11日に高等師範学校附属音楽学校となり、同32年4月4日に再び独立し東京音楽学校となった。そして昭和24年6月1日に現在の東京芸術大学が開設されたものである。)(註31)

幸田延は文豪幸田露伴の妹であり、ヴァイオリニストの安藤幸の姉である。

高等師範の附属小学校に入学し、山勢松韻に就いてお琴を習ったが、この山勢松韻は音楽取調掛の講師をしていて、当時の箏曲の第一人者であった。

十三才の頃、メーソンに「この子は音楽の才があるから個人教授をしたい」と言われ、毎週土曜の午後、学校が終わると本郷の森川町にあった音楽取調掛に通った。

しかし、延は、メーソンが忙しかったので主として中村専からピアノの手ほどきを受けたが、メーソンは明治15年に帰国することになったので、延の母を呼び、取調掛へ入れて専門家にしようすすめた。

そこで、小学校を終えた延はすぐ、取調掛に入学し、ヴァイオリンは多久隨に習うことになった。

在学中の延は給費生となったほど成績優秀であり、ヴァイオリンに限らず、ピアノ、和声学、音楽史についても抜群の成績であった。(註32)

明治15年4月に入学した延は同17年2月のヴァイオリンの試験でクロイツァーR. Kreutzer 教則本の最後の第42番を弾き、試験官だった多久隨はこれに88点という評価を与えている。(註33)

その後、延が研究科に在籍中にウィーンからディットリッヒ Rudolf Dittlich (1861～1919) が招かれて着任したので、ヴァイオリンはディットリッヒに学ぶことになり、後、彼のすすめで留学することになる。

最初の留学先はボストンのニュー・イングランド音楽院で、これは、その音楽院の校長がメーソンの友人だったからである。

ここでのヴァイオリンの先生はエミール・マール Emil Mahr (1851～1914) であった。(マールはヨアヒムの子で1877年からロンドン、1885年からヘンシェルのコンサートマスターであり、1876年から1885年まではパイロイトでも演奏し、1887年からボストンのニュー・イングランド・コンサバトリーの教授になった人である。)

ボストン留学は最初から一年間の予定だったので、次の年にはウィーンに行き、有名なヨゼフ・ヘルメスベルガー Joseph Hellmesberger (1828～1893) に習うことになった。

ヘルメスベルガーはディットリッヒの師でもあるので、恐らく彼の推薦で師事出来たのであろう。

明治22年4月に出航し、ボストンで一年、更にウィーンで五年勉強した延は帰国後、その六年に亘る研究の成果を世に問うべく、ヴァイオリン、独唱、ピアノ、作曲の発表、妹の安藤幸、ユンケル、ウェルクマイスターとの弦楽四重奏などを演奏し大活躍であった。(註35) 図4



第一ヴァイオリン、ユンケル、第二ヴァイオリン、安藤幸、ヴィオラ、幸田延。セロ。ウェルクマイスター

(延は妹の安藤幸のヴァイオリンが自分を凌駕するようになって以来、室内楽では、ヴィオラを受けもつようになった。)

図4

また、東京音楽学校では 帰国したディットリッヒの後任教授として、ヴァイオリン、ピアノ、声楽、作曲、音楽理論と、すべての音楽分野の指導をし、その結果として、必然的に大きな権力を持つようになり、明治30年代の終り頃から上野の女王、または西太后と呼ばれるようになった。そして延を廻って次第に派閥が形づくられるようになる。(註34)

以下、当事の新聞記事を綴ることによって且ては最大級の称賛を捧げた、後の権力者延に対する過酷とも思えるその弾劾ぶりを記そう。

明治39年2月5日 国民新聞

#### 洋楽界の流派

近時西洋音楽の流行に連れて音楽会の開催せらるるもの頻々なるが此間にも、自ら流派あり、第一は東京音楽学校派、第二は宮内省雅楽部派、第三は和洋折衷楽派にして尚此外にも

細く区分すれば貴族派とも言ふべき權門出入の楽派あり楽器屋派とも言ふべき楽器屋の顧問、否な扶養楽家あり、各講習所に立て籠れる私立学校派あり、而して現今の我那知名の楽家を色分けすれば先づ音楽学校派に属すべきは幸田延子、幸田幸子の姉妹を筆頭として橘糸重、神戸絢子、杉浦チカ子、頼母木コマ子などの同校教授助教授を頭に戴く同校研究生及び卒業生にして次に雅楽部派に属するは東儀、多、齒、芝、大村、上等の性を冠れる雅楽部伶人の一団にして此連中は明治音楽会及び国民音楽会等の機関を有する第三の和洋折衷派と称せらるるは音楽学校師範卒業生なる、北村季晴氏を中心として集れる一団にして之に属する者は太田勘七、石原重雄、石野巍、岡野貞一、前田久八等の何れも音楽学校卒業生のみを以て成り、機関として楽友倶楽部あり根拠を楽器屋共益商社に据て運動せるを以て、一に又楽器屋派とも謂ふ、以上三集団は常に反目嫉視して犬猿も常ならず、偶々一秀才家出るや争て自家の藁籠中の者とせんと意へるも面白く然も音楽学校派が常にその覇を握れるにその他の流派が此権力に対して快かざるも事実なり只だ音楽学校に男性の音楽家の長く止まる者なく常に支離滅裂相敬のは不思議と言ふ可し、此他小山作之助、山田源一郎、天谷秀、天野ハツ、堤正夫、中山六郎、金須嘉之進などの諸氏は所謂私立学校派と称すべき者にして何れも各個人の学校若しくは講習所を有しつつあれども是等人皆音楽学校出身者なるより見れば今日の都下に於ける楽界は全く同校より出たるものと言ふを得べきか、和洋折衷楽派にも目下米国にある高折周一、岩本捷治両氏の如きは又別に一旗幟を立てたるものにして其の知名の楽家、藤井夫人、前田嬢、吉川嬢、中村春両夫人の如き何れも音楽学校派に属せり然かし同じく同校出身者にて田村虎蔵氏は都下に於けるよりも名声九州に高く同地にて田村派と称する唱ひ方すら存する程なりと、又納所弁次郎氏は貴顕の門に出入するを以て貴族派とも称すべく尚外人楽家にはユンケル氏ありケーベル氏ありハイドリヒ氏あり共に音楽学校の御雇教師なり、只だドブラウィッチ氏独り宮内省雅楽部派の教師として在るのみ其の技の優劣は未だ遽かに判すべからざるも音楽学校主任御雇教師の故を以てか現今我邦西洋音楽界のオーソリティーはユンケル氏の手に移し居れりと言べし。(註36)

明治41年9月1, 2, 3月 やまと新聞

男女学校評論

……………幸田延子女史は本校に少からざる功勞ある人で又藝術家として尊敬すべき天才を有してゐる。併し教育家としての品性人格は絶体に非認せざるを得ない、教育家養成主義たる本校に斯の如き人を置くのは害あって益がなからう。女史が退けば本校否音楽界が如何に発展するかは言を俟たずして明である。其理由は茲に説明せずとも既に世評の存する所であろう。……………(註37)

明治41年9月11日 毎夕新聞

幸田教授の進退

兎角の世評姦しき彼の東京音楽学校首席教授幸田延子女史の進退に就いては或は諭示退学たるべしとか辞任すべしなどと伝えられしも未だに其事なく女史が去就に就ては目下殆んど五里霧中の有様なるが女史が技倆に対しては己に後進に優に女史を凌ぐものあれば又校内に於ける人望も今や一向に振はざるより仮令女史にして退職すとも同校の教授上には更に些の差支へを生ぜざるは明かなるに湯原校長が未だに女史に対し断然たる処置を取らず全く其辞表の呈出せらるるを待ち居る如き有様なるは女史が同校に於ける其勢力を恐るるに起因するものにて実に女史の勢力と云へば同校職員生徒の大部分に崇拜者を有し女史が一挙一動自ら校内を動かす如き大勢力にて若し湯原校長にして断然たる処置を為すに於ては其結果先年学習院女学部が前下田部長辞任の際惹起したる騒擾以上なるべしとの考へより未だ何等の処置を為さざるものなりとて目下頗る校長の不能を鳴すもの多しと云ふ。(註38)

明治41年9月14, 15, 18, 19, 25日 東京朝日新聞

#### 憂ふ可き音楽界

……………音楽学校が教員養成を主とするに止まると云ふことは、目下の遺口を見て十分明瞭にして、一より十までその手法を以て行はるるは何れの方面より云ふも証拠立てらるるところなるが中に尤も感心出来ざることは、其側一派が他に出でての演奏を厭ふこと是なり。今之を同校の女王幸田延子女史に就て云はんに、女史の常に日ふところは、他に出ての演奏は芸人らしいから可厭とのことなり、女史一人のみならばそれにてよしとしても、女史の徹頭徹尾其部下及び同校出身者に迄これを拒むるは、吾人其何の故なるかを知るに苦む。また仮に女史は他の演奏には断じて応ぜざるの一点張ならばそれにてよしとせんも囑託者に向って何百金の要求をなし、または同時に出演する人名を糺して、遂に出金の額に応ずる能はざるを嘲り、或は同校の系統を引かざる他の音楽家を誹謗し、果は音楽は戯にあらざるとの言訳を張って、楽界将来の運命を顧慮するにもあらねば、国民目下の生活程度をも度外に置くなどは、莫大の国庫の財を受け、我芸術界の爲め大に国民の期待を身に負ふて、数年異邦に滞りし上帰朝後は栄遇一身に余りつゝある、大責任を負へる女子の言とても思はれず。今女史が胸裡を割って見ば、他に出でての演奏を嫌ふは何の理由もなかるべく、単に芸人同等に誤解せられては内職たる高貴の御出入に差支へを来たすの点に外ならざるべし。これ等は婦人の浅智恵として嗤って過ぐべきも、校裡に在っては権を専らにし、外に向っては一流の出演を拒むが如き等は不埒なり。……………(註39)

明治42年9月10日 東京日日新聞

#### 音楽学校の廓清

(幸田教授の辞職、湯原校長の手腕)

東京音楽学校教授従五位幸田延(40歳)は就職以来14年の久しき間教鞭を執りピアニストとして我楽界に其名を駆せ貢献する処亦尠からざるもそれと共に常に音楽学校紛擾の禍根をなし夙に一部の識者をして鞏縮せしめたるが遂に十日の官報を以て其帷幕武島文学士と共に依

願休職を發表せらるるに至れり。

#### 湯原校長の談

湯原校長は島崎教授と相對して椅子により往訪の記者に幸田教授休職の顛末を語るらく幸田教授が女の身をもて永く好位地にありては兎角の世評五月蠅ければ之を避んが為め且は後進の道を開くため辭職せむとて昨年7、8月以來再三予に対して辭意を漏したるも後任者の關係もあれば予は其の時機にあらざる旨を告げて留任を説きたるが本年4月獨逸よりピアニスト、ロイテル氏を招聘し又ピアニスト神戸教授も仏蘭西（仏國留学生は女史を初めとす）歸朝したれば目下当校に三名のピアニストを要せず且幸田教授の辭職を迫る甚急なるを以て學校にても己に留任の必要を認めず双方の都合最も宣かりしを以て今回之を納れしなり尤も幸田教授は進んで辭表を提出せむと云ひしも俸給等の關係もあれば二三日前文部大臣に是を計りて休職とせしなり。（註40）

明治44年9月19日 報知新聞

#### 幸田延子女史の待遇

休職東京音樂學校教授幸田延子女史は去八日にて休職満期となり全く音樂學校との縁故絶ゆることとなりしかば宮内省にては東宮職御用係としての同女史の身上を詮考の結果同日付にて辭令を交付したれば女史は純然たる東宮職御用掛り（奏任待遇）たるに至れりと（註41）

明治中期の樂界で女王とも西太后とも言われ、他の比肩を許さぬ程の実力を持ち、それが仇となり、明治の終りには遂に休職に追い込まれた延の晩年は淋しく、あれ程打ち込んだ西洋音樂よりも邦樂にひかれ、清元に熱中していたと言われる。

音樂に捧げた一生ではあったが、生涯を通じての独身はやはり淋しく、生徒たちに〔早く結婚しなさい。子どもがないと晩年は本当に淋しいものですよ。〕と語ったとも伝えられる。士族の家に生れ、氣位が高く芸人のように見られることを嫌い、一度も自分のリサイタルは開かず、音樂學校の演奏會、社交的な會に出演しただけであった。

樂壇では初の藝術院會員にえられた彼女は、終戰の翌年、昭和21年6月14日、76才の生涯を終えた。（註42）

#### 追記

この稿を書き終えてから Grove の辞典 The New Grove Dictionary of Music and Musicians に図表3の John Thomson のことが載っているのを発見した。こんな身近かにあるものに気付かなかったとは反省せざるを得ない。

グローヴによれば、トムソン氏（1805～1841）は音樂學者であり作曲家でもあった人で、メンデルスゾーン、シューマンの知人であった。

写本として残されている彼の作品（抜粋）のなかに Capriccio, vn, pf があると書いてある

がカプリチオはロンドンの Cramer 社から出版されている。音楽取調掛で用いたヴァイオリン  
教本トムソン氏の作者はやはり、このトムソンではなからうか。

(本学講師＝バイオリン実技担当)

#### 註

- (註1) 遠藤宏 明治音楽史考 p.24  
(註2) 世界大百科辞典 初版第7巻 p.10 平凡社  
(註3) ねず・まさし, 小池晴子訳 ヤング・ジャパン 横浜と江戸 第一巻 p.236, 237  
(註4) 横浜市教育委員会 横浜ゲーテ座 p.24  
(註5) “ p.19  
(註6) 秋山龍英 日本の洋楽百年史 p.213  
(註7) 堀内敬三 音楽五十年(上) p.71 講談社学術文庫  
(註8) 押田良久 雅楽鑑賞 p.218  
(註9) 増井敬二 フィルハーモニー p.73, 74 第53巻 第6号  
(註10) 川端茂 レコード産業 p.78, 79  
(註11) 野村光一 お雇い外国人 p.16  
(註12) 堀内敬三 音楽五十年史 上巻 p.72  
(註13) 東京芸術大学音楽取調掛研究班編 音楽教育成立への軌跡 p.15  
(註14) “ p.441, 442  
(註15) “ p.27  
(註16) “ p.94  
(註17) 押田良久 雅楽鑑賞 p.220  
(註18) 小川昂編 洋楽の本 p.176 B  
(註19) 音楽教育成立へ軌跡 p.121, 122, 126  
(註20) 音楽新報 明治40年10月号 日本の洋楽百年史 p.169, 170  
(註21) 文芸春秋社 室内楽 p.106, 107  
(註22) 大日本教育会雑誌 第20号 日本の洋楽百年史 p.25, 26  
(註23) 音楽教育成立への軌跡 p.16  
(註24) 東京芸大同声会会員名簿 p.21  
(註25) 音楽教育成立への軌跡 p.94  
(註26) 近代日本女性史 「音楽」 p.166  
(註27) 音楽教育成立への軌跡 p.40  
(註28) “ p.365, 366  
(註29) Frank Altmann Tonkünstler Lexikon I p.156  
(註30) 三浦俊三郎 本那洋楽変遷史 p.210  
(註31) 東京芸大同声会名簿 p.21, 22, 24, 149

- (註32) 近代日本女性史〔音楽〕 p.160, 165, 166, 168
- (註33) 音楽教育成立への軌跡 p.361
- (註34) ピアノの本 通巻 第19号 中村洪介 幸田延とその周辺(中) p.10
- (註35) 1億人の昭和史 明治 F p.205
- (註36) 日本の洋楽百年史 p.146
- (註37) " p.187
- (註38) " p.188, 189
- (註39) " p.189
- (註40) " p.205
- (註41) " p.238
- (註42) 近代日本女性史〔音楽〕 p.177, 178